墓をフィルターとして見た死後の家族

井上治代
（ルポライター）

はじめに

「死後の家族」と言いますと、死者の意識のように思われがちですが、私が言います「死後の家族」は、生きている人たちが、死後をどのような意識でとらえているかという観点に立った見方です。

昨年の一月が最終でしたが、私が行いました「現代人の墓に関する意識調査」の結果も取り入れながら、お話していきたいと思います

一

お墓は死後のすみか

まずアンケート調査で、「お墓とはあなたにとってどんなところですか」という質問に対して、十数年前のアンケートでは、「先祖を祀るところ」と答えている人が圧倒的に多かったわけです。ところが、最近では「先祖を祀るところ」と考えている人はもう四割でしかありません。新しくふえてきた答えには、「死後のすみか」だと考えている人が三割、「その他」にマルをつけた三七・九％の中には、「自分の生きたあかしをモニュメントとして残すところ」だとか「何も感じない」とか、「お墓はあくまでも生きて残った人たちのものだ」といった回答が多くて、先祖

とのつながりというものが全然見受けられませんでした。

ですから、「死後のすみか」と考える人たち、それから「その他」の人たちも合わせて、「先祖を祀るところ」と考えている人たちが非常に少なくなっているということではないかと思います。

しかし、「お墓参りに行くことがありますか」という質問に対しては、「はい」と答える人が八六・四％もいます。それから「先祖は大切だと思いますか」に対しては八四・一％の人が「はい」と答えています。

お墓は先祖を祀るところではなくなっているにもかかわらず、「先祖を大切だと思うか」という質問に対して八割以上の人が「大切だ」と答え、八割五分以上の人が「墓参りに行く」と答えている。これは一体どういうことなのだろうか。「あなたにとって先祖とは何か」という質問をしてみました。その答えが、先祖というと、両親や祖父母のことぐらいという人たちが、四割弱いらっしゃいました。「その他」という中には、「自分のルーツへの興味」だとか、「先祖とつながっている不思議さ」といった知的興味みたいなもので先祖をとらえている。

ですから、今までのような「何々家先祖代々」といった脈々と続いている先祖という感じでとらえている人たちが非常に少ない。そんなようなことがアンケートから出てきました。

今までは家を守るための血縁による縦系列の先祖崇拝があったと思いますが、それが、先祖といっても親の代か祖父母の代ぐらいまでしか考えられなくなって、先祖よりもむしろ自分及び子供、孫という方向へベクトルが向いていっているというのが、現代ではないかと思います。

死後の感覚

今、お墓とはどういうところかという質問に対して、死後眠るところ、自分の死後のすみかだと考えている人が非常に多くなったということをお話しましたが、自分の死後のすみかですから、こういうところがいいとか、こういうところは嫌だとか、死後の感覚が生まれてきているわけです。

「どんな墓や埋葬方法がいいですか」という質問に対して、一番多いのが「ジメジメしないで、明るくきれいなところ」というのが三〇・八％で、従来の先祖代々の「〇〇家之墓」を上回っています。

表―1　どんな墓や埋葬方法がいいですか?

	回　　答	総数%	女%	男%
従来の墳墓	先祖代々の「〇〇家之墓」	29.6%	23.6	37.9
	納骨堂	9.8%	12.9	5.3
	壁墓地・ロッカー式墓	2.4%	2.9	1.8
	室内の墓地	1.5%	1.7	1.2
従来の墓を発展	既成の墓ではなく，ユニークなものに	8.1%	9.2	6.5
	石には自分の好きな言葉を刻みたい	11.2%	12.5	9.5
	ジメジメしないで，明るく奇麗な所	30.8%	36.7	22.5
墓にこだわらない	お墓は必要ない	18.6%	22.5	13.0
	骨灰を海・山などに撒きたい	18.6%	22.1	13.6
	献体を希望する	12.7%	13.8	11.2
その他		17.1%	15.8	18.9

つまり、家の墓ではなくて、死後の感覚が生まれたために、明るくてジメジメしないところがいいんだという気持ちなのです（表―1参照）。

私が取材を続けていくうちにこんな例にあいました。鎌倉霊園の話ですが、蛇が大嫌いな人がいて、ジメジメした墓も嫌いだというので、ステンドグラスを張って太陽を取り入れられるようにして、蛇がこないように四隅に硫黄を配して蛇よけをつくりました。死後のことなんか死んでしまえば終わりだと思っていれば、そんなことをする必要もないのですが、自分の死後の感覚が生まれてきたために、墓にも蛇よけをしたわけです。

それから、比叡山延暦寺の一般墓に見るお墓の話ですが、一代で財を成したある会社の経営者が、両親の墓をつくったのですが、自分が小さいときに両親は非常に苦労をした。何も恩返しができないうちに亡くなってしまったので、せめて墓は立派にということで、地下に二十畳ぐらいの大理石を敷き詰めた石室をつくりました。

そして、苦労をかけて何もしてあげられなかった両親のために、夏は暑かろう、冬は寒かろうというので、冷暖房設備をしてくれと言ったそうです。それは管理上の都合で許可されず、現在はそうなっておりませんけれども、それもやはり死後の感覚が生まれてきたために出現した例ではないでしょうか。

お墓のチラシがよく新聞に折り込まれていますが、お墓を求める人がどういう点を見るかというと、日当たりがいいかどうか、前のお墓の陰になりはしないかとか、周りに目にやさしい緑があるかどうか、さらに東南の角地がいいというような、生前の住居を求めるのと同じような感覚でお墓を選ぶような時代になっています。それもやはり死後の感覚が生まれたから、死後の住まいを選ぶに当たって、自分の好きなところ、環境のいいところを選ぶ傾向にあると思います。

また、「お墓にはだれと一緒に入りたいですか」というアンケートの結果では、夫の先祖の墓に入りたがらない妻たちが三分の一いるということがわかりましたが（表―2参照）、このことは、家制度的なものとの関連は後でお話するとして、今まで申し上げたような、お墓が死後のすみかと化していることと、死後の感覚が生まれていることに非常に関係があると思います。

例えば、東京で暮らしていて、夫の先祖の墓が遠い地方にあったとします。そうした場合に、死後のすみかで、自分が死後そこで暮らすわけですから、自分が一度も住んだこともない土地は嫌だとか、遠いところは嫌だとか、雪のないところで暮らした人が、雪に埋もれてしまうのは嫌という。また、先祖といっても自分の親または祖父母の代までという意識しかないので、夫の先祖となると、あかの他人になってしまうわけです。ですから、死後あかの他人と一緒に暮らすのは嫌だということをいう。

そのほか、「お姑さんとは一緒に入りたくない」というのがありました。せっかく核家族化して自分たちだけで暮らしてきたのに、死後、お姑さんと一緒になるのは嫌だというわけです。これは死後の感覚が生まれていないときは、

表－2　お墓には誰と一緒に入りたいですか?（複数回答可）

	人数	女%	男%	総合%	旧来の傾向	現代的傾向
一　人	58	13.8	14.8	14.2		○
夫　婦	148	37.5	34.3	36.2	○	
子　供	58	15.4	12.4	14.2	○	
家　族	140	33.8	34.9	34.2	○	
先　祖	65	13.3	19.5	15.9	○	
自分の両親	77	22.9	13.0	18.8	○男	○女
分骨して実家の墓	13	4.2	1.8	3.2	○男	○女
気のあった友人	26	9.2	2.4	6.4		○
不特定多数の人と共同墓地	27	7.9	4.7	6.6		○
お姑さんとは，一緒に入りたくない	14	5.8				○
お嫁さんとは，一緒に入りたくない	2	0.8				○
夫とは，一緒に入りたくない	5	2.1				○
妻とは，一緒に入りたくない	1		0.6			○
夫の先祖の墓には入りたくない	35	14.6				○
妻の先祖の墓には入りたくない	1		0.6		○	
その他	77	16.3	22.5	18.8	○	○
未記入	5	1.2		1.2		

死んでしまったら自分もご先祖様になって祀られるんだから、死後、お姑さんと一緒に暮らすという意識がなかったので、問題にもならなかったわけですけれども、墓が死後のすみかという、死後の感覚が生まれたために、夫の先祖の墓は嫌だという人たちがふえてきたということがいえると思います。

二

死後の具体化と死に支度

日本人の平均寿命は、一九二〇年代では四十歳代でした。それが五、六十年たちますと八十歳代になった。これは乳幼児死亡率の関係がありますから、必ずしも二倍にはね上がったというわけではないのですが、二倍になったというところには、あらゆる家族の崩壊、変容が起こって当然でありますし、これほど驚異的な上昇を見せた時代がないわけですから、人生八十年時代をどう生きるかといっても、お手本がありません。私たちが今一つ一つ壁にぶつかりながら、新しい生き方を模索しているところではないかと思います。

では、平均寿命が延びたことによってどんなことが起きているか。一つは、私たち日本人は高齢者と言われて長く生きる時代になったということだと思います。高齢者と言われて長く生きるようになるということは、死を意識して生きる年月が長くなったということで、死と隣合わせで生きる時代が長くなったことです。ですから、最近では尊厳死の問題だとか、臓器移植の問題だとか、いろいろな死にまつわる問題が人々に関心を持たれているのでしょう。

死というものは、仏教的にはどう解釈されるか、一応の解釈はあると思いますが、一般的には死んだらどうなるのか、死とはどういうものかということはわからないわけです。亡くなった人が帰ってきて話をしてくれるわけでもない。唯一、わかるとしたら、墓なのです。死んだらあそこに眠るという、死が唯一具体化された装置が墓なのです。ですから、皆さん死に支度として墓を買うようになった。

これが逆に墓も買っていなかったりしますと、死んだらどこに行くのだろうか。本当に子供たちは墓をつくってくれるのだろうかという心配が出てきます。

したがって、死んだらどうなるのかということの一つのよりどころとして墓を買う。そして、その墓に行けば、先

に死んだ両親もいるだろうし、そこでずっと待っていれば自分の子供もかわいい孫もやってくると考えることによって、心安らかに生きられるというわけです。

ですから、大手の石材店では六、七割が生前墓だと言います。生前墓がふえている一つの理由は、死ぬのを待っているより、生前に買わせることによって販路拡大につなげる石屋さんの企業努力というものもありますけれども、一方にはやっぱり高齢化社会になって、晩年をよりよく生きるために死に支度として生前墓を買っておくということが行われています。

私もお墓を買ったという人に何人にもお会いしましたが、「これでホッとした。安心した」という安らぎを得ている人をかなり見かけます。なかには墓の近くまで引っ越す人もいます。あるデータで高齢者の引っ越しの一番の理由は、「墓のあるところへ」でした。

死後の結婚

一九八五年、比叡山の延暦寺に、跡継ぎのない人たちのためのお墓としては先駆となりました久遠墓というお墓ができました。そこには個人墓と夫婦墓がありまして、夫婦墓のほうに妙な墓があります。

墓石の前面には一つの苗字があって、夫と妻らしき名前が彫ってある。夫婦墓を買っていますし、ご夫婦の墓だなとわかるのですが、横の俗名のところを見ますと全く違う苗字なのです。

これはどういう方たちかと聞きましたところ、重婚的内縁関係にある人が買った墓だというわけです。俗っぽい言い方をしますと、不倫の関係にある人です。

そういう場合、死ぬとよく遺骨の取り合いが起こります。法律上は遺骨を持っているからといって、相続分が多いということはありませんが、日本の国民的感情でいきますと、遺骨を持った者が正統派とする意識があります。ですから、葬式をどちらで出すか、どちらが喪主かということがかなり相続争いに絡んでいくかと思います。したがって

婚姻届の出ているほうは遺骨を一生懸命確保します。

そうしますと、届けが出てない人は、せめて死後こそ添い遂げたいと願って夫婦墓をお求めになる。ただし、遺骨が入らないので、男性の髪の毛を生前に入れておいて、死後添い遂げるという、ちょっとお涙ちょうだいもののお墓がありました。これを私は死後の結婚と名づけたわけです。

ついでにお話しますと、この夫婦墓には、夫婦ばかりではありませんで、ひとり身になってしまった八十歳、九十歳の姉妹の墓もあります。

六十五歳以上の単身世帯の八割は女性だと言われています。ですから、最後に残った者同士、姉妹が一緒に入りましょうというので、夫婦墓を買っているケースがあります。

それから、ホモセクシャルやレスビアンといった同性愛の方、要するに、跡継ぎが生まれようもなく、法的に夫婦と認知されない人たちが行き場がなくて、永代供養の夫婦墓を求めています。

死後の離婚

ここでいう死後の離婚というのは、夫と一緒は嫌とか、夫の先祖の墓は嫌といって、ひとりで墓に入っていく妻たちのあり方を死後の離婚と名づけています。

先ほどの比叡山延暦寺の例でいきますと、瀬戸内海の沿岸に住んでいる女性が、生前は夫と別れたいと思いながらも、今でこそ離婚した女性の職場はありますが、かつては専門職以外になかなか女性の職場はなく、世間体もあるし子供のこともあって、離婚もせずやってきた。そのうち夫が病気になり、妻は一生懸命夫を介護し、夫を看取ってお墓に埋葬した。けれども、自分は死んでまでもこの人と一緒は嫌だ、死んだら晴れてひとりになりたいということで、比叡山延暦寺の個人墓を買ったという方がいらっしゃいます。

死後の離婚を分析していきますと、二つに分けることができます。一つは、生前における家庭内離婚の清算という

こと、もう一つは、夫の家に対する縁切りという二つの傾向があります。

最近、停年退職した亭主に離婚届を突きつける妻がふえているといいますが、家庭内離婚のまま過ごしていく人たちもいます。しかし、そういう人も死後こそ自分の心のままに眠りたいと、死後の離婚をとげる人たちがふえているのです。

新潟の角田山妙光寺の永代供養墓・安穏廟を買った例ですが、妻がひとりで入る墓をご夫婦で買いに来る人たちが多いのだそうです。このへんにも形式だけは夫婦という家庭内離婚の形態がよくあらわれているといえます。ご住職が「あなたはそれでいいんですか」と夫に尋ねると、「妻の意思を尊重したい」というお茶を濁したような返事がある。

もう一つの例は、子供や夫と独立して墓には自分一人で入りたいという妻が、安穏廟を大変気に入ったというのですが、その場で申し込まず、「帰って主人に相談してきます」というのだそうです。

何日かたって「夫もいいと言ってくれましたから」と言って申し込まれたということです。これまた、妻一人で入る墓を決めるのに一応、夫に相談してからというあたり、形式だけは整えた家庭内離婚の清算という図式をよくあらわしているといえるでしょう。

もう一つは夫側の家に対する縁切りということについてですが、意識調査のコメントの中に、「姑と一緒は嫌」と答えた方がどんなことを言っているかというと、「あの世までいじめられ、横で夫がお姑さんの味方をしてそうだそうだと言うのはわかり切っている」「嫁の時代に姑からいびられた。だから嫌」「息が詰まりそうだ」「ぞっとします」「血縁でも愛情でも結ばれてないから」「○○家之墓というのは家制度時代の遺物だ」「夫の家の人間になったのではないから、私にとっては夫の家というのは何の関係もない」「墓に入ってまでも嫁という立場は嫌」といった理由を挙げています。

妙光寺さんの永代供養墓を見に来た女性の例ですが、夫が兄弟姉妹が多く、そのうちの一番下ではないのですが、末のほうに位置していて、なかなか実家から自立しないというのです。妻としては、この分でいくと夫の家の墓に入ることになってしまうだろうと。そうなる前に自分の墓を買い求めようと思って安穏廟を見に来たというわけです。

その女性は青森県出身、東京在住の方で、旅行を兼ねてお姉さんを誘って下見に来た。そうこうしているうちにお姉さんも、「私も亭主と一緒に入るのは嫌だから、私もあなたと一緒に入ります」という話になりまして、姉妹で入ることに決まったのですが、さらに「弟が横浜でまだ結婚してないから、あの子も入れてやろうよ」という話になった。結局は結婚してからの家族ではなくて、自分たちが生まれ育った家族に戻っていく、要するに、夫の家との縁切りといった傾向も、永代供養墓を買う人たちにあります。

このように、死後の離婚の中にも二通りありまして、一つは家庭内離婚の清算、もう一つは夫の家との縁切派もいます。

死後の自立

「お墓にはだれと一緒に入りたいですか」というアンケートに対して、「気の合った友人と入りたい」という人と、「不特定多数の人と入りたい」という人が、男女合わせて一八％いました。男女別に見ますと男性が六％、女性が一三％でした。家族とではなくて、気の合った友人、不特定多数の人、血縁関係のない人たちと入りたいと思っている人たちが女性のほうに圧倒的に多いわけです。

これはどういうことかといいますと、男性は仕事人間で時間に追われ、一生懸命妻子のために働いている。ですから、男性にインタビューしますと、「墓のことなんか考えていないよ」という人たちが圧倒的に多い。だれと入りたいかというと、「当然、女房と子供に決まっているじゃないか」という答えが返ってきます。

では、女性はどうかといいますと、家族と一緒に入れたらすばらしいが、そうではないときのことを考え始めてい

ます。「いつまでもあると思うな亭主と子供」、人生八十年時代になって、最後に残るのは女性たちなのです。つまり、女は人生の晩年に「死別シングル時代」があることを意識し出したということです。

女性は男性より暇がありますので、カルチャーセンターや公民館の婦人講座に通って、「人生八十年時代をいかに生きるか」というようなことを勉強しているわけです。人生八十年時代の晩年に、死別シングル時代がありますよ。現在あなたは亭主がいて安定しているでしょう。しかし、いつかは子供も夫もいなくなるときがあるのですよ。ですから、精神的な自立をしていきましょうという学習が、女性は非常に進んでいる。

お墓も家族と一緒かせめて夫と一緒に入れたら幸せと思うが、どこかでそうならない場合もあるのだから、気の合った仲間とネットワークをつくっておかなくてはいけないんじゃないかとか、そういう可能性も一応心の中に準備しておかなければいけないということまで考えてきている女性が、二割弱いるということです。

三

死後の核家族化

これは、墓をめぐる問題の中で、私の一番申し上げておきたい重要なことです。その前に、家族のことについてちょっとお話したいと思います。

家族といいますと、一般的に、一人の人間は一生のうちに二つの家族に属すると言われています。それは自分が生まれ出たときの出生家族、それから、結婚して子供を設ける生殖家族の二つです。今シングルの人がふえていますから、独身の人は一つの家族にしか属さない場合も多いわけですが、一般的には二つの家族に属すると言われています。

イエ制度時代の家族を拡大家族と言いますが、それは、出生家族も生殖家族もみんなつながっていました。イエというものを見ますと、家屋敷も長男一人が相続し、お金も今のように兄弟姉妹に分割されないで長男一人が相続しま

したので、はたから見ますと家族の成員が少しづつ変わっていくだけで、一見すると、その○○家は家屋敷も変わらずにずっと続いていました。ですから、墓も「○○家之墓」という、代々継がれるような墓であっても、当然、ふさわしかったわけです。

ところが、今のように核家族化が進んできた場合、どうなのか。家族の死というものをお考えになったことがありますでしょうか。

核家族の誕生は、一組の男女が結婚することから始まりまして、子供が一人生まれ、二人生まれ、子育てがあって家族が膨脹し、そして、結婚によって一人去り、二人去り、だんだんと少なくなり、配偶者の一人が亡くなり、最後の一人が亡くなったときに核家族は死ぬわけです。核家族というのは本来一代で死ぬことを約束された家族なんです。ですから、核家族のお墓が○○家之墓で代々継がれていくという形態をとること自体が、既に無理なわけです。

だからといって、跡を継がないで勝手に無縁墓になってしまえばいいかというと、お寺さん側の運営の問題もあります。お寺さん側にもいいようなシステムが組まれていかなければならないと思います。

ですから、現在の核家族化がどういうものなのかということをしっかり意識した上で、一般の家庭側の事情とお寺さん側の事情がうまく合う形で、永代供養なども取り入れながら、方法論を考えなくてはならないと思います。

子供の数も非常に減っています。一人の女性が一生に産む子供の数が一・五三人と、二人を切ってしまいました。ということは、これから結婚する人たちはみんな長男・長女同士、それぞれが墓を抱えて結婚することになるという状態が起きていますので、墓の跡継ぎ問題というのは非常に深刻化してきていると思います。

墓をめぐる問題

今、お墓をめぐる問題というのは、大きく三つに分けることができると思います。一つは承継問題です。

第二は、葬送の自由の問題です。海とか山に遺灰をまくことは刑法百九十条遺骨遺棄罪に違反しないかどうかとい

う法律解釈が、新聞などで騒がれています。違反ではないという人たちは、墓地埋葬に関する法律の中に、まいてはいけないという条文がないこと。遺骨遺棄罪に抵触するとすれば、それを勝手にまいたりする場合であって、そこには祀るという気持がなかった場合である。故人を祀るという気持ちがあったならば、刑法百九十条（遺骨遺棄）に抵触しないじゃないかという解釈です。

皆さんもご存じのように、江戸時代まではいろいろな葬法が混在していた。ところが、明治政府によって埋葬することに一本化されてしまった。けれども、多様化した生き方が市民権を得てきた現代に、大きい墓を建てる権利もあれば、まく権利もあるのではないかという葬送の自由も主張されています。

第三は、墓地問題です。マスコミが墓地不足と驚ぎたてますが、ところが、墓地不足といえるのは大都市だけです。東京も少し郊外に行くと、儲かると思って石材業者がつくった墓地が、売れないで余っている。ましてやもっと地方になりますと、お寺がつぶれるほど過疎化している。墓地問題というのは日本列島レベルで考えないといけないと思うのです。

その件につきましては、私は今、現代版両墓制復活みたいなことを考えています。江戸時代まであった両墓制、つまり埋め墓と参り墓をつくるという両墓制を現代版にしたらどうだろうか。

それはどういうことかといいますと、地方に埋め墓をつくり、東京に碑とか小さな合祀墓みたいなものを設けて、供養は東京で行うわけです。

よくこういう話を聞きます。おじいちゃん、おばあちゃんが、

「私は死んだら、やっぱりふるさとに眠りたい」

そうしたら、息子が、

「いや、それは困るよ」

「自分も子供もこの地域に根差してしまった。お墓参りも大変だから、おじいちゃん、おばあちゃんの勝手は許せない」と。

両墓制をとりますと、地方のお墓に眠り、東京のお墓に参ることができる。

釣の好きなお父さんの、「海の近くで眠りたい」という希望もかなえてあげられる。

それには、地方のお墓と、東京の合同碑みたいな参り墓の合わせた費用が、東京で墓を一基買うより安いか同じであるということと、管理料とか供養料を東京側が取るか地方側が取るかということが問題です。中間にセンターを置いて、地方が霊園で、東京がお寺さんの場合、どういうふうに配分するかとか、両方がお寺さんの場合に永代供養料をどういうふうに配分するかというのをきちっと決めていけばいいのです。そのネットができますと、将来は転勤族のために、どこかで一基買っておけば、コンピューターに、どこに何基残っているというのが入力されていて、最終地で一基求められる。そういうようなネットワークもつくれるのではないか。

墓の承継問題

民法八百九十七条に祭祀財産の承継順位が書いてあります。最優先されるのが、亡くなった人の指定ですが、それがなかった場合は慣習に従って定めなさい。慣習に従って定められない場合は、家庭裁判所が定めるとなっています。日本の場合、遺言を残す人は少ないですから、多くは慣習に従って定めています。

ところが、この「慣習」とは何かということが問題になって、ここで女性差別が起こっています。二つの例を申し上げます。

一つは、お母様が先に亡くなり、お父様が最近亡くなった三姉妹の長女が「私が継ぎます」と、お寺さんにきっちり申し出ました。すると、お寺さんから、今うちの墓を買うと六百万円します。その半分の三百万円でいいから払ってくださいといわれた。彼女は、男が墓を継ぐなら一銭も払わなくていいのに、どうして女の私が継ぐといったら三

百万円払わなければならないのだろうかという憤りを感じている。

これは、女性が結婚して改姓してしまうと、継ぎにくい状態があるということで、お寺さんは保証金みたいな感じで三百万円を先に取ってしまおうという考え方だったわけです。

実の娘の代までは、まだ継がれやすいのですが、その子の代になったら、父方の墓を抱える可能性も高いし、多くは父方の姓ですから、何で姓の違う墓を守らなければならないのだろうかと思う。父方、母方の墓二つ抱えた場合に、必ず妻方の墓が無縁になりやすい。ですから、先に保証金を取っておこうと、三百万円を払いなさいというのが、お寺さんの考え方だと思います。しかし、これは法律的には払わせる権利はないわけです。

それから、都営の八王子霊園を買った女性の例ですが、今、公営霊園は一墓所一墓石一家名という原則があります。彼女は自分の両親の墓を買いました。自分の両親の姓は、結婚して改姓した彼女にとっては旧姓です。両親の姓、つまり旧姓で墓を建てましたところ、都営霊園から文句が出て、使用者（購入者）と違う家名を墓石に彫ってはいけないということで削らされて、「憩」という字を彫らされた。一回彫ったのを削り、また彫ったので費用もかかってしまった。

これはどういうことかというと、契約者と同じ家名でなければいけないということが書いてある霊園があります。この場合、契約者は結婚して姓が変わってしまっている。ですから、結婚して姓が変わった女は実家の墓が継げませんよということをいっているようなものなのです。

都の霊園課に、女性は差別されていませんかと聞きますと、「民法八百九十七条では女性は継げませんとは、どこにも書かれていません。女性でも大いに結構です」といわれるのです。しかし、使用規則や内部通達などで女性が継げなくするようなものがいっぱいあります。つまり、「慣習による継承順位の概要」の（四）「女子よりも男子を優先する」、（五）「先に生まれた者を優先する」とあります。これを見ると、旧民法時代の家督相続の順位じゃないかと

見間違えます。これは、東京都の建設局公園緑地部霊園課に内部通達として出されているもので、慣習とは旧民法の家制度時代の慣習そのものです。女よりも男を優先するなんて書かれていて、それで指導されていたのでは、女が継げるはずがない。通達だとか使用規則レベルでは慣習が変われないような状態になっている。都の霊園課は、「慣習を反映している」と言うわけです。

しかし、卵が先かニワトリが先か、こういうような通達が出ていて縛っていますと、やっぱり慣習だって変わりようがないのです。

四

今後の墓のあり方

先ほど来、跡継ぎのない人たちの墓が非常にふえてきているということをお話しました。そこで、私はアメリカへお墓の取材に行ってきました。なぜアメリカかといいますと、ヨーロッパは永代使用のところが少ないのです。地質調査をして、その土で遺骨が何年で自然に還るかを調べて、例えば、五年で還るということがわかりましたら、その五年間が契約期間になって、五年たちますと、次の人たちが契約をして、そこにまた遺骨が入るという形が多いわけです。すべてではないのですが、永代使用という感覚が薄い。アメリカの場合は、日本と同じように永代使用です。この点では日本とかなり近いものがあります。ただし、違うところはアメリカの場合は墓地を買います。日本の場合は使用権を買うということで、そこで大きく違いますが、永代ということでは一緒です。

では、アメリカの場合は後を守る人たち、管理料を支払う人たちはどういうふうにしているのだろうか。日本よりももっと家族崩壊が進み、離婚率が二組に一組という状況ですし、息子や娘が遠くに行ってしまうと、飛行機でふるさとに帰らなければならないアメリカにあって、跡継ぎ問題をどうしているのだろうかということが、私の関心事で

ありました。向こうに行って真っ先にそういうことを調べてきました。

結論から申し上げますと、アメリカには墓基金制度というのがありまして、州によって違いますが、まずお墓を買った金額のうちの約一割が基金として手をつけずに信託銀行みたいなところにプールされます。例えば、ノーベル賞の場合、元金を預けておいて、永遠にノーベル賞が与えられるのと同じように、元金を運用して、その利子で管理料を永遠に出し続ける。ですから、息子が遠いところに行ってしまおうが何しようが管理がしていけるという制度をとっていますので、管理料に関しては全く心配ないと言っておりました。

今、西多摩霊園あたりでそういう制度を取り入れて、三十三回忌までの管理料を先に基金として信託銀行に預けるといったことを考えています。既に実行されているかどうか、私が取材したときには、「今、計画中で、パンフレットまでできています」ということでした。

そういうように、跡継ぎ問題を、管理料や供養料を先にいただいておくという形で解決できるかと思います。

また、墓の形態でいきますと、合祀墓が非常にふえてくるのではないかと思います。

先週も大阪のある企画会社から電話がありまして、個人墓をつくりたいので、アドバイスしてくれというのです。「個人墓というと、例えば、比叡山延暦寺の永代供養墓の中の個人墓みたいなものですか」というと、どうもその人は「個人墓」というのがわかってなくて、要するに、家族と入らない、跡継ぎのいない人たちのための永代供養墓を個人墓といっているようなのです。それぐらい何もわからない方たちが、永代供養墓をつくったら儲かるということでかなり参入してきている。

ですから、今後、形だけをとらえて合祀墓がふえていくと思います。私が思いますのに、形だけをとらえてつくっても、心が入っていなかったら、買い求める人たちが少ないのではないかと思います。

一つには、こういう例があります。沖縄には、ご存じの門中墓といいまして、一族が何百人も入っているという物

凄い大きな墓があります。しかし南部の門中墓は、沖縄では少ないほうだというのです。南部以外の人たちの墓は本土と同じように核家族化してしまい、みんな核家族の墓を建てているために無縁墓がいっぱいふえている。

南部は、みんなが昔ながらの一つのお墓に入ることができる。それだけではなくて、いろいろな共同体としての助け合いがあって、無縁になる人は出ません。

南部の糸満の人は、「ここはほかの沖縄地域よりすばらしい。これは沖縄の美風です」とおっしゃる。そういうのを聞いていると、「なるほどな」と思ってしまいがちなのですが、本土で今できつつある永代供養墓、合祀墓とは違うとはっきり申し上げたい。沖縄のそれは地縁や血縁で支えられた墓なのです。ですから、中には封建的な年中行事も行われ、そして、行事の中でも男が女よりも優位だし、門中の中で人と違うようなことをすると、村八分に遭うという古い体制なのです。そういう上に、美風といわれる合祀墓ができているわけです。

ところが、現在の合祀墓の形をした永代供養墓はどう違うかというと、一たん地縁とか血縁を切った上に成り立っている。ですから、例えば、妙光寺の安穏廟の例でいきますと、跡継ぎのない人たちが、地縁とか血縁を断って、縁あって妙光寺さんの安穏廟を買う。そうしますと、そこに新たな縁でネットワークができていく。ですから、大変平等であるし、自由である。これが本土の新しい形、一回地縁、血縁を切った上に成り立ったすばらしい合祀墓ができるのです。

ですから、形だけをつくってしまって、永代供養をしますよというのではなくて、そういう墓を求めてくる人たちの心を満すものでなければならない。地縁・血縁を超えるけれども、心のふるさと的なものを求めないかというと、そうじゃなくて、都会にはなくなった心のふるさとといいますか、自然みたいなものも求めてきますし、都会を離れて墓のある地域に引っ越す人が出るぐらいに心のふるさとを求めている。ですから、ただ単に合祀墓をつくるというだけではなくて、新しい地縁とか血縁ではないネットワークで、人々が年一度でも二度でもいい、何かそこに集まれ

るような会をつくるなり、新しい縁をつくるという形でないと、ただ、入れ物をつくれば跡継ぎのない人たちが来るかというと、そうじゃない。やっぱりメンタルな部分の装置がないと、墓をつくったらそれでいいというものではないわけです。

沖縄の門中墓がいいといっても、核家族化したものになれた者が、そういう門中墓を支える地縁・血縁のネットワークの中に入っていけるかというと、封建的な年中行事の中に、お嫁さんなんか入っていけません。形は一緒だけれども、そこに流れる精神だとか、ネットワークの違いみたいなものは、しっかりと踏まえておかないと、また時代が逆戻りするようなことになりかねないと思います。

葬儀について

現在の日本の葬儀は葬儀社主導型の葬儀だと思います。ところが、アメリカは消費者主導型の葬儀です。それから、葬儀社自体が社会的地位が高い。立派な人たちだといういわれ方をされています。

アメリカの葬儀はどんなシステムになっているかといいますと、人が亡くなりますと、遺族が葬儀社に電話します。多くの場合、病院が葬儀社とタイアップしていますけれども、病院で亡くなった場合でも、葬儀社を選べる権利が遺族のほうにあります。

ファーストコールといいまして、初めて電話を受けた葬儀社が、病院へ遺体を受け取りに行きます。その遺体は自宅に持っていかないで、葬儀社の遺体安置所に安置されて、今度はオペレーションルームに運ばれ、エンバーミングといって遺体防腐処置をされ、その後、ドレスアップしたり化粧をされて、何日間後、葬儀社内にあるアットホームなすてきなお部屋に運ばれて、遺族と対面します。

その対面するまでの間、早い人は一日ですが、大体三、四日はあります。この三、四日あるというのが非常に大切で、日本の場合ですと、遺体が腐敗してはいけないからすぐ葬式をしなければならない。そこで、葬儀社の人が悲し

みに打ちひしがれている遺族のところにやって来て、「あなたの家の格ですとこのくらいにしなさい」「お坊さんもいなければ、うちで用意しますよ」みたいな感じで、取り仕切っていってしまう。ですから葬儀社主導型なのですが、アメリカの場合は、エンバーミングをしている三、四日の間を非常に有効に使っています。

その三、四日の間に、葬儀社と打ち合わせをする日時を決め、遺族は葬儀社に行きます。葬儀社の中にはお棺のショールームがあります。日本の葬儀は祭壇中心ですが、アメリカの場合は故人中心で、例えば、故人が生前、木が好きだったから棺の材質は木にしましょうとか、色は何にしましょうみたいなことを、遺族はゆっくりと考えて決め、着せてあげる洋服も用意したりとか、日本で言えばお坊様はだれにしましょうとか、どんな音楽を流しましょうみたいなことも、全部料金表があって、一つ一つ納得がいくように、現物やパンフレットを見せられて決めていきます。

それが終わってから、今度はきれいになった遺体と対面して、日本の通夜に当たるようなものとか、告別式に当たるようなものとかが執り行われます。

最近は、葬儀社の中にチャペルがあります。ほとんど葬儀社内で葬儀を執り行う時代になってしまいました。教会で執り行う葬儀は非常に少ないです。私はアメリカの映画で、教会で牧師さんと遺体を埋め、みんなが泣きながらお祈りをしているというシーンをいっぱい見たような気がしましたので、葬儀は教会で行われると思い込んでいました。ところが、葬儀社が非常に発達して、葬儀社内にチャペルもつくってしまい、教会で葬儀をしなくなった。

この話は非常に怖い話で、それを日本に置きかえますと、寺で葬儀をしなくなって、葬儀社で葬儀をするようになったということと一緒で、チャペルは日本の斎場なんです。今、日本の葬儀社では斎場をつくるのがラッシュとなっています。あちこちで斎場をつくり、病院に入り込んだ葬儀社がすべてを自分のところで執り行えるように、斎場までつくってしまい、一大葬祭ビジネスを展開しようとしている。ですから、もし日本もアメリカの後を追うならば、お寺で葬儀をするよりも、葬儀社に頼めば全部やってくれるとか、宗派に関係なくやってくれるという利便性で、

顧客（信者）を葬儀社が取りかねないということが起こると思います。日本もそうなる前に食いとめるといいますか、お寺で葬儀をする意義を強調すべきだと思います。

アメリカもそうですけれども、ちゃんとした教会で葬儀をしますと、宗教性が高い。丁寧ですし、いろいろな宗教にのっとったものがある。それから、宗教性の高い装置がある。葬儀社の装置はどんなのかといいますと、アメリカはいろいろな人種がいますから、宗派によって内装をちょっと変えるぐらいで、今キリスト教で葬儀をしていたと思ったら、次に日系の人の葬儀があるとすれば、壁をクルッと回すと仏像になるという形のチャペルもあったり、宗派は問いません、何でもできますということになってくると思います。

アメリカの葬儀士の教育システムのお話をしますと、日本と決定的に違うのは防腐処置（エンバーミング）があることです。これは宗教上の違いで、キリスト教というのは復活思想があるので、いつか復活するときのために遺体はきちっととっておかなければならないという考え方から、遺体を保存するということがなされているわけです。これは歴史をさかのぼれば、エジプトのピラミッドまでいってしまいますが、これが一般の人たちに普及したのは南北戦争のときだといわれます。

南北戦争のときに大量の戦死者が出て、軍医が大量のエンバーミングをした。そのとき、これを商売にすれば儲かるぞということを感じて、戦争が終わってから、その軍医は軍隊をやめてエンバーミングの医院を開いて、非常に儲けたわけです。

もう一つは、南北戦争の直後にリンカーン大統領が暗殺されます。そのときにやっぱりエンバーミングをしたそうです。一般市民の間に、エンバーミングをされたリンカーン大統領があらわれまして、「これはすばらしい」ということで、エンバーミングが一般の人たちに知らされた。

そうすると、さすがアメリカと思われるのは、今度はエンバーミングに使う防腐液をつくっている製薬会社が、エ

ンバーマーを養成して各地で遺体処理をするようになれば、自社の薬剤がたくさん売れるということで、エンバーマーの教育をやり始めた。消費者の需要もあって、あっちこっちでエンバーミングが行われるようになった。

そこで、国が、これは大変、規制をしなければならないということで、エンバーマーと葬儀士のライセンス制を敷いたわけです。これは州と国のライセンスの二つあって、ライセンスを持っている人でないと葬儀士になれません。ライセンスを取るためのコミュニティーカレッジというのがありまして、日本流で言えば葬儀大学ということになりますが、大学というよりは日本の専門学校みたいなところです。

そこで何を学ぶかといいますと、もちろんエンバーミングに必要な解剖学、それから薬品を使うので化学、血液をいじったりしますので病理学、免疫学を勉強して、同時に心理学、経営学、色彩学も学びます。色彩学というのはいろいろな肌色の人がいますから、その人に合った化粧だとか洋服を選ばなければならないということもあります。さらに、人々に安らぎを与えるような斎場内のインテリアの色合いも学びます。

この中で皆さんたちに一番関係があると思いますのは、心理学です。葬儀士が学んでいるわけです。どんな心理学かというと、悲嘆の心理学、悲しみのプロセスを学んで、それにどう対応していくかという心理学です。私はこれを聞いたときに、それはかつては僧侶がやっていたものではないか、悲しみに遭った人たちに対して、カウンセリングをするのは牧師さんであり、僧侶の仕事であった。それを葬儀士養成の学校で教えるわけです。

学校は一年制と二年制が主です。中には三、四年制もあります。公認の学校はアメリカ全土で四十校ありまして、そのうちの三、四年制大学は二、三校しかありません。ですから、ほとんどが一、二年制で、一年学校に通って、一年見習いをして、テストに合格すればライセンスが取れるわけです。そのうちの主な勉強は、遺体をいじったり、血液の交換で、その実習に時間がかかって、心理学を勉強する時間は少ないと思います。

その人たちが葬儀社に行って何をやるかというと、カウンセリングをやっているわけです。アメリカの葬儀社が現

在のような社会的地位までのし上がったというのは、地域に貢献するということを行ったからです。それから、法律問題にも答えられ、悲しみの心にも対応できるように、葬儀士の資質向上を図ったからです。

葬儀社の窓口にはカウンセラーがいまして、日本みたいに死んだときのセレモニーの担い手ではなくて、仏教ホスピスでやっているような内容ですが、地域のガン患者のためのカウンセリングをしてあげたり、ガン患者を持つ家族のためのカウンセリング、それからボランティアの紹介もしています。また、アメリカでは高校の保健体育の時間に、選択科目ですが、生と死の勉強がありまして、そこで葬儀のことを学んだりするのですが、そのときの教材ビデオを葬儀社が提供するとか、社会に貢献する葬儀社というイメージで、社会的な地位を得るためにいろいろ社会活動をしています。

例えば、「生と死を考える」というシンポジウムを主催して、地域社会に貢献する。なおかつ死んだ人だけを対象としているのではなくて、生きている人たちをサポートするのです。

ただ、内情としては、一年で数単位の心理学を学んだところで何がわかるかということがありまして、四年制大学で心理学を一生懸命勉強して、学位を取ってカウンセラーになっている人から苦情が出ているという現状もあるそうです。

我が国の既成の葬儀社は、葬儀社内部のセミナーはやっていますけれども、国レベル、県レベルのライセンス制にもなっていませんし、中には生前の顧客を取るために、ゲートボール大会の賞品を提供するといった企業努力をしているところもあるそうですが、まだまだ戦略として社会に貢献し、アピールしていくというところまではいっていません。

ところが、一番怖いのは、今までの葬儀業界以外の人たちの参入です。そういう人たちはいろいろな企画力がありますから、今申し上げたアメリカのようなメンバーをそっくり揃えて参入してくる可能性もあると思います。そうし

ますと、今、消費者というのは、消費者中心、消費者主導型の葬儀になるべきだと考えています。葬儀社が取り仕切るのではなくて、消費者自身が考えたい。これからは高齢者と言われて長く生きる時代ですから、自分の死のことというのは非常に興味を持ってきた。死の次に葬儀とか墓に感心がいきますから、これからは死にまつわる選択は自分たちで選びたいんだという気持が非常に強い。そこに新しい参入企業が目をつけると、ちゃんとしたカウンセラーを置いたり、法律のわかる人がいて、遺産相続の問題、遺言の問題など生前のサービスをしますよという会社が出かねないと思います

おわりに

今、申し上げましたような中に、本来お寺さん、僧侶の方たちがやってきた部分が非常にあると思います。アメリカの企業のサクセスストーリーじゃないけれども、巨大ビジネス化、商売という営業努力のもとに、どういうふうに教会なり牧師さんの仕事が取り上げられていってしまったか。逆に見れば、やっぱり心の問題を一、二年勉強した者に何がわかるか。カウンセリングというのは本来宗教者の専門でもあった。しかし、そういう知識を持っていても、今の情報化社会ですから、アピールが足りないと消費者に浸透しない。そのアピールがうまいのが業者です。ですから、お寺さん側でもどうアピールするかというのは、情報化社会に生きていく以上、非常に必要で、その辺の戦略も重要ではないかと思います。（拍手）

※本稿は、平成三年三月十三日に現宗研主催で行った現代宗教研究セミナーにて講演されたものを筆録したものです。